

世界文化遺産登録に向けて

佐渡の金銀山史を彩る人々

○河村彦左衛門（生年不詳〜1608）

河村彦左衛門は、越後国（新潟県）の大名であった上杉景勝の家臣です。天正17年（1589）、景勝によって佐渡が攻略されると、上杉氏が派遣した9人の代官の一人として湊町（現在の両津地区）に居住しました。文禄4年（1595）、景勝の領国が会津へ移されると、鶴子外山（現在の佐和田地区）の陣屋に移り、鶴子銀山の経営を担当したといわれています。

慶長2年〜5年（1597〜1600）にかけて河村によって行わ

◆国指定史跡

「河村彦左衛門供養塔」（大安寺）



れた慶長検地は、佐渡全島で行われた初めての検地です。この検地によって、地字・刈高・名前が記された検地帳（現在の課税台帳）が作られ、年貢を納める量が決められました。

関ヶ原の戦い以後、佐渡が徳川幕府の天領となると、銀山経営の才覚がかわれて、引き続き吉田佐太郎・田中清六・中川主税らとともに4代官の一人として残りました。慶長7年（1602）、吉田・中川が佐渡に、

田中・河村は江戸に在府していた際に、代官の吉田佐太郎が年貢の五割増を命じたことで、翌年に新穂村・羽茂村・北方村の農民が江戸に訴えました。これにより、吉田は切腹、中川は改易となり、連帯責任によってその地位を追われた河村は、甥のいる村上に移ったといわれ、慶長13年（1608）に亡くなりました。

相川江戸沢町の大安寺には、河村彦左衛門を供養する巨大な五輪塔が残されており、国史跡に指定されています。

○田中清六（生没年不詳）

田中清六は、近江国（現在の滋賀県）出身と伝えられ、主に越前国（現

◆市指定文化財「真光寺村慶長検地帳」



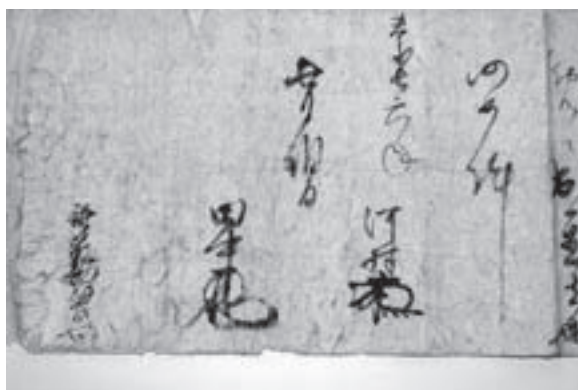
在の福井県）敦賀を拠点とする北国海運に従事していた商人でした。慶長5年（1600）、田中は徳川家康によって佐渡代官の一人に任命され、翌年に佐渡に来島して銀山や地方を統治しました。

この時、田中清六が拠点を置いた地が佐和田地区の田中村であるという説があります。実際に白山神社境内などの一部では「田中」という字名が残され、江戸時代には田中村周辺の村名にすべて「五十里」名が付けられるのに対して、この地域だけ「田中村」と呼ばれていたのは、田中清六との関係性を考えるうえで注目されます。

銀山経営にのりだした田中は、運上入札制という制度を採用しました。これは、金銀鉱脈の発見者がある場所を長期間にわたって稼ぐのではなく、発見者がある程度の利益をあげた後に、標準で10日間と期間を区切って運上（現在の営業税）の額を入札させ、高額入札者による期間を稼がせるもので、これによって短期間で金銀山

を稼ごうとする山師や金穿りが続々と佐渡に来島し、佐渡金銀山が大発展する契機となりました。慶長7年（1602）、田中から家康のもとに送られた銀は1万貫（金に換算すると17万両）に及んだといわれています。同年、代官の吉田佐太郎による年貢の5割増の命令によって、翌慶長8年（1603）年に新穂村・羽茂村・北方村の農民が江戸に訴えたことで、河村彦左衛門と同じく連帯責任によってその地位を追われましたが、次の代官職を引き継いだのが大久保長安でした。

現在では、田中清六の足跡を残す「斎藤おもや文書」が佐渡博物館に寄託展示されています。



◆河村彦左衛門(右)と田中清六(左)の花押(斎藤おもや文書)

◆教育委員会

世界遺産・文化振興課

☎ 27-4170